

## 「森を測る」

F40 白井聰一

東京近郊にある国有林で森林整備のボランティア活動を始めたのは定年退職後である。好きな山の中で草木や動物を相手に汗をかいて、将来子孫に少しでも美林を残せたらとの思いがあった。日本の森林は荒れているといわれて久しい。森林大国といわれながら40%以上を占めるスギ、ヒノキ林は、輸入材に押されて伐期になっても利用されることなく、手入れもされないまま放置されている。産業にとっても環境にとっても良いわけがない。そこで雪害を被り材として収穫できなくなったスギ、ヒノキ林を伐り開いて落葉広葉樹の苗木を植えた。少しでも昔の針広混交林に戻せたら幸いだ。

しかし、森林整備の経験のほとんどない素人集団ではなかなか思うに任せない。尾根あり、谷あり、ガレ場あり、日蔭ありの山で、どこに何を植えたら育つのかの知識が乏しい。そこで、植えた樹木の生育調査を始めた。在学4年間は測るための学問を専攻してきた者には、測った結果を元の活動にフィードバックすることは得意中の得意。だが、この森林再生活動は美林をつくることが究極の目的ではなく、生物多様性の復元や公益機能（水源涵養、災害防止など）の向上が達成できなければならない。広葉樹林の生長が確認できるようになってきた段階で、それを利用する哺乳類、鳥類の調査も始めた。広葉樹林が再生し、そこに彼らが戻ってくればわれわれの活動は無駄ではなかったのだと、期待を抱きながらこの活動に励んでいる今日この頃である。



「鳥類調査のための録音機格納ボックス」



「哺乳類撮影用の赤外線カメラ」

(2017.6.19 作成)